

## アメリカ大学拡張協会における 拡張講師の一考察

小池源吾

(今治明德短期大学)

### はじめに

アメリカ大学成人教育史における1890年代は、イギリス大学拡張の導入とそれを合衆国の地に適合せしめようとする模索でもって特徴づけられる。わけでもアメリカ大学拡張協会 (American Society for the Extension of University Teaching) がこの時期に果たした役割は、注目に値する。

アメリカ協会の基本的性格を理解するためには、その前身であるフィラデルフィア大学拡張協会 (Philadelphia Society for the Extension of University Teaching) に言及しておく必要がある。そもそもこの協会は、フィラデルフィア地区における大学拡張の先導的試行を企図して発足した任意団体であった。全国に先がけて着手された実験スキームは、たちまちにして衆目を集めるところとなる。その結果、大学拡張に関する情報のみならず実践上の指導や援助をも求める声が各地で聞かれた。しかしそうした要請にことごとく応えることは、一地方協会の能力を越えた。もはや全米規模の協会 (national association) の必要性は明白であった。ここにいたってフィラデルフィア協会は、アメリカ協会へと発展的解消をみる。それは、フィラデルフィア協会結成よりわずか半年後の1890年12月のことであった。

そして大学拡張事業に目を転じれば、アメリカ協会の活動範囲は、東部諸州はいうまでもなく、西はコロラド州、南はルイジアナ州にいたるきわめて広い地域に及んでいる。つまりアメリカ協会とは、全国を視野におさめた大学拡張運動の推進母体であったのみならず、拡張事業面でも全米で最大規模を誇る拡張協会であった。

ところで大学拡張教育を行うにあたって拡張講師にまず求められたのは、とりもな

おさず拡張講義コースの提供である。そこでは、コースの編成および講義要目の作成から講義とクラスの実施、そして受講生が提出した課題論文や最終試験評価にいたる全過程が、彼らの責任下におかれた。加うるに拡張講師には、大学拡張運動ひいては教育活動のための伝道者 (apostle and evangelist) としての役割も期待された。いずれも高等教育を社会のあらゆる階層に提供し、以って高等教育を人びとの生涯にわたる関心事にまで高めることを指向する、大学拡張の理念から敷衍された活動である。その意味で大学拡張事業の成否は、拡張講師にかかっていたといっても過言ではなからう。

それだけに拡張講師の確保は、大学拡張運動における最重要課題であった。拡張講師の安定的確保は、いうまでもなくそうした人材を十全に獲得することにある。しかし必要なだけの人材が獲得されたとしても、彼らが短期間のうちに拡張教育を放棄したなら、拡張講師の安定的確保は常に危機にさらされるであろう。その意味で拡張講師の問題は、量と質を念頭におきながら、供給と定着の視点より検討に付されねばならない。

そこで本論文では、上記の問題意識から、拡張講師の実態をアメリカ協会について明らかにし、ひいてはそのことを通して90年代大学拡張に固有の問題についても論究しようとしている。

## 1 拡張講師の供給源——大学——

アメリカ成人教育史が示すところによれば、大学拡張の運営には大別して二つの形態がみられる。ひとつは、大学が主体的に拡張講義コースを編成し、それを直接に大衆にもたらすものである。これに対し、大学拡張協会が大学と大衆を結ぶ媒体として拡張講義コースを組織し、拡張事業を行う形態がある。いうなれば協会主導型大学拡張と称しうるものである。無論アメリカ協会は、後者に属する。この運営形態をとった場合、当然のことながら拡張講師は大学に求めねばならない。

しかし現実には、すべての大学が拡張講師の供給源となりえたわけではなかった。たとえば財政的に逼迫した状態におかれた小規模大学にとって、独立採算の見込みすらない拡張事業を単独で行うことは不可能に近い。ここからスウォーモー大学の学長ダガーモウ (Charles Degarmo) は、拡張講師を他からリクルートする方法を提唱し<sup>(4)</sup>ている。

このように概して小規模大学は、拡張講師を供給するよりも、むしろ需要する立場にあった。結果的に、拡張講師の潜在的供給源は、おのずから大規模大学に限定されてくる。

折しも大規模大学は、ドイツ大学の影響を受けて研究機能をあわせもつ一方、学問領域においても著しい拡大をみせていた。それは、この時期に合衆国の大学が新たな教科目の導入を図り、ほぼ今日に通じる機構を整えたことで証左されるであろう。こうした総合大学化は、当然のことながら大学教師の生活にも根本的な変革を迫った。ハーバード大学哲学部長パーマー (George H. Palmer) は、<sup>(6)</sup> 四半世紀前と比較しながら大学教師の生活を詳細に記している。

大学教師には、多忙な法律家とか医者、実業家と同様に、余暇などない。自ら専門とする領域を拡大するような研究を行ったり論文を執筆することはもとより、特定の教科目に関する文献を読みこなし遅れをとるまいとするだけでも大変な仕事である。加えて授業は、もはや教科書に書かれたことをしゃべったり暗唱するだけでは事足りない。悠々自適な生活は過去のものとなった。今や教師は、絶えず授業の準備に追われるようになった。しかもそれは永久に修正し続けねばならない。また試験の作成が求められる。学生の読書を指導し、彼らの論文を校正する仕事もある。自分でも膨大な量の文献を読まねばならない。実験室やセミナー、討論会では大学院生を指導しなくてはならない。各種の委員会や教授会にも出席せねばならない。将来の発展に備えて大学や学部の規則を改定する作業もある。教え子が上級の学位を取得すれば、彼らの就職口探しに諸機関 (college and school) と連絡をとる必要も起こってくる。かくして一日の重労働を終えた後に、なおかつ時間的な余裕があったならば、学生たちが指導を求めて来室するのを覚悟して待たねばならない。

もっともパーマーは、イギリス大学拡張を無分別に導入することに真向から異を唱えた人物として知られる。そして拡張講師の問題は、彼の批判的見解を支える重要な根拠をなしていた。そうした文脈からすると、先に引用した下りについても字義通り解釈するのは多少ためられる。だが同様な指摘は、大学拡張に積極的な評価を下した人びとの間にも散見できる。一例をあげれば、コロラド州立大学のガードナー (John Gardner) 教授がいる。彼は、コロラド州における大学拡張運動の動向を概観した論文中、毎週12~18時間の授業をこなした上に、2都市以上で拡張講義コースを担当するのは不可能に近い、と述べている。<sup>(6)</sup> 平均的な人物があえてそれを行えば、自身の健康を損うか、さもなくば双方の活動に求められる任務の不完全な遂行のいずれかを結果するだけである。彼によれば、そうした激務に耐えうるのは強じんな肉体を有するわずかばかりの大学教師であった。<sup>(7)</sup>

拡張講師の獲得が容易ならざる事態は、大学教師の生活構造の変化とともに、大学の保守性とも分かちがたく関係している。アメリカ協会が1893年に「The Influence of University Extension upon the Universities」と題する論文を発表した意図も、

まさしく大学拡張に対する大学当局の理解を促すことにあった。<sup>(8)</sup>したがって論文では、大学拡張が大学にもたらすであろう有形無形の利点が熟っぽく語られている。

すなわち、大学拡張によって高等教育の機会が広く一般大衆に提供されることになれば、これまで高等教育とは無縁の生活をしてきた多くの人びとは、その意義を認めるようになる。そこから大学への興味や関心も生まれる。他方、公私立を問わず大学への財源援助および進学するか否かは、市民の側での自由意志に委ねられている。それだけに、市民が大学の意義を認識し、また進学欲求が高まれば、大学にとっても経営上好ましい結果が約束されるであろう、と予測する。

次いで大学改革を実施するにあたって、事前の試行あるいは実験の場として大学拡張の効用があげられている。先述のごとく、総合大学化を指向するに伴って、各大学はあいつぐ改革を断行していた。一度策定された改革案は、制度化に先だって、現実には即して妥当性が検討されねばならない。その際大学拡張は、改革案について市民に最終的な審判を求める格好の機会を提供する、と説く。さらに大学拡張は、一般大衆の要求や彼らが現実生活の中で当面する問題を大学にもちかえる上で、有効なチャンネルとしても作動する。そこから、教育と研究の両機能の間に望ましい関係を樹立する可能性も生まれてくるであろう、と高唱した。

たしかにこの種の広報活動は、大学拡張運動の普及に与って力があつた。事実、寛大な精神を持ちあわせた若い大学教師たちが、大学拡張を、高等教育に対する永続的な関心と大学への共感を大衆の間に生ぜしめるすぐれた機会とみなし、強く心を動かした。<sup>(9)</sup>にもかかわらず、概して大学当局をはじめ大半の大学教師は、大学拡張に対して無関心ないしは消極的な反応しか示さなかったのもまた事実である。今日でこそ大学拡張は、教育、研究に次ぐ第3の機能として大学に位置づけられている。しかし大学拡張が大学の本義的な機能と認識される過程では、その革新性ゆえに伝統的な大学観との相克を余儀なくされた。ましてや大学拡張の評価すらいまだ定まらない90年代初頭のことである。諸大学がこの新奇な実験スキームに疑念を抱いたとしても不思議ではなからう。しかもそうした疑念は、大学の権威や既得権益に固執する大学人の保守性と相まって、しばしば大学拡張に対する批判となって表出した。

その意味で、アメリカ協会の場合は興味深い。当協会における拡張講師の陣容は、創始以来10年間の活動を総括した報告書から窺い知れよう。報告書には、上記の期間中にながしかの講義コースを担当した総計115人の講師名が、所属する機関とともに記載されている。<sup>(10)</sup>そこで115人について所属機関別に分析を試みると、特定の教育機関に属さない18人と中等教育機関に在職する9人を除き、88人がイギリスの3大学を含む27大学のいずれかに所属する大学教師であった。もっとも、講師はそれら27大学から均等に獲得されたわけではなく、数の上では、大学間で著しい偏りがみられ

る。すなわちペンシルベニア大学の教師が29人を占め、以下プリンストン大学7人、ブラインモール大学5人、シカゴ、ハーバードの両大学が3人、マサチューセッツ工科大学とラトガーズ大学がともに2人、と続く。多くの他大学は、各1人となっている。

すでに明らかなようにアメリカ協会は、ペンシルベニア大学を拡張講師の主要な供給源としていた。ここには、双方が同じくフィラデルフィア市に所在したとの事情に加えて、当協会の発足の経緯が少なからず関係しているように思われる。つまりフィラデルフィア協会の結成を提唱し、かつ初代会長に就任したのは、時のペンシルベニア大学総長ペパー (William Pepper) その人である。また彼の後任として1891年4月から4年半に渡って第二代会長をつとめた ジェイムズ (Edmund J. James) にしても、同大学の有力な政治学教授であった。

かくのごとくアメリカ協会は、少なくとも発足から初期にかけてはペンシルベニア大学と不即不離の関係にあった。アメリカ協会が講師の面できくにペンシルベニア大学に依存できた理由もここに存する。ただし大学当局は、自ら擁する教授陣をアメリカ協会に対して組織的に派遣したわけではない。換言すると、学内での本務に支障をきたさないとの条件さえ満たしたなら、アメリカ協会が行う拡張事業への参画や協力は、あくまで教師個人の自由裁量にまかされていた。それだけに拡張講師の供給量は、大学教師たちの意識に負うところが大きい。たしかにペンシルベニア大学の教師たちは、大学拡張への懐疑をあからさまにすることはほとんどなかった。だからといって、彼らが大学拡張の意義を十分に認識していたとはかぎらない。それは、ペパー、ジェイムズとペンシルベニア大学関係者で占められてきた会長のポストが、大学に職位をもたぬプリンリ (Charles A. Brinley) に移った1896年5月以後、同大学教師たちがアメリカ協会に対してあからさまに表明した冷ややかな態度に端的に示されている。

## 2 拡張講師の養成——セミナー——

拡張講師の獲得をむずかしくしたもうひとつの事情は、正規の大学教育と大学拡張教育との本質的な相違に起因している。周知のごとく大学教育は、中等教育を終えた同年齢層の青年を対象にして行われる。したがってそこには高い同質性が保証された。それにひきかえ大学拡張では、知的・倫理的に自己の向上に関心をもつという一点を除けば、受講生に共通した属性は認めがたい。年齢・性・国民性はいうまでもなく、なによりも重要なことに既習の教育水準にはなほだしい個人差がみられる。

生活条件の差も加わる。すなわち大学生は、専ら大学における生活に没頭していれ

ばよかった。大学が設定し要求する活動に、自らの全時間、全精力を傾注することができた。しかし大学拡張の場合、受講生の多くは、日々の生計を立てることに追われ、時間や労力の大きな部分をそれに割かねばならなかった。家事や慈善事業、宗教活動を主たる関心事とする婦人たちもいた。いずれにしても彼らにとって、大学拡張は、生活を構成する諸要素のうちのひとつにすぎなかった。このような人びとであればこそ、外的な強制によって講義への出席を義務づけたとしても、おそらく期待された学習成果は望めないであろう。拡張教育のむずかしさは、ここに帰着する。こうした受講生の特性は、拡張講師にも大学教師とは異なる資質を要請する。無論担当する教科に関する学識は重要である。しかしこれは、大学教育ならいざしらず、大学拡張では成功のための必要条件ではあっても、十分条件ではなかった。そこでパウエル (Lyman P. Powell) は、自らの体験から拡張講師の条件をつぎのように指摘する。

拡張講師は、自分が担当する教科に精通し、教育方法を熟知していなくてはならない。加えて彼には、大学ではほとんど顧みられることのない特別な才能が必要である。つまり楽しくかつ効果的に公開講座を行う才能である。学問的であると同時に、巧みな話術が求められる。彼は、学生たちに知識を与え、そして彼らから知識を引き出す教師にとどまらない。雄弁術を駆使して自己のメッセージを家庭にもたらす説教師でもある。すなわち彼は、昼間の仕事の疲労から学生たちの間に生じる不活発な状態 (inertia) を克服し、彼らに関心が希薄であればそれを喚起し、精神を低俗な次元からより高いところへと導く。

こう述べた後にパウエルは、拡張講師に欠くべからざる資質として、明快さ (lucidity)、課題の多様性 (variety)、細かい配慮 (attention to detail)、熱情 (spiritual passion) の四つを列挙している。

またプリンリは、アダムス (Harbert B. Adams) に宛てた書簡の中で拡張講師の条件に触れ、「大学拡張への情熱、好ましい風貌や態度、巧みな話術、知識、そして聴衆に読書や学習を奨励する気質に欠けたなら、いかに聡明であったとしても、拡張講師としては失格である」と書き記している。「大学拡張ほどに、ひとりの人物の人格と能力が試される活動は他に例をみない」といわれたのも、ゆえなしとしない。だがあえて約言するなら、拡張講師の要件は、大学教育に求められる専門性 (speciality) と通俗講演に求められる大衆性 (popularity) の二点に尽きるであろう。これにしたがえば、かならずしもすぐれた大学教師がすぐれた拡張講師であることを意味するものではない。実際、専門性と大衆性を兼備した大学教師の数は、きわめてかぎられていた。

アメリカ協会にとって緊急の課題は、ほかならぬ拡張講師団の核づくりであった。しかしいつまでも拡張講師の供給を大学に待つわけにはいかない。こう状況分析した

アメリカ協会は、それでも適切な訓練の機会さえ用意されるなら、拡張講師となっても十分成功しうる人材は豊富にある、と判断した。なかでも大学院の学生には、大きな期待がかけられた。これは、ジェイムズが雑誌『Review of Reviews』にわざわざ論文を発表し、大学生たちを大学拡張に勧誘したことからも窺えよう。<sup>08</sup>

かくして1892年の秋にアメリカ協会は「大学拡張セミナー」に着手する。いうまでもなくその目的は、特別な才能を有する人物を大学拡張スタッフとして養成することにあつた。セミナーは、アメリカ協会の事務局があるフィラデルフィア市15番街とチェスナット街が交差する角のYMCAビルの一室において、会長ジェイムズの所管の下に、10月1日から翌年6月1日まで、毎週5日開講されることになっていた。そして講師リストには、アメリカ協会の拡張講師はもとより、著名な教育者たちが名前を連ねている。そしてセミナーで予定された教育の概要は、以下のようである。<sup>09</sup>

- 1 イギリスにおける大学拡張の起源と発展史——拡張事業の詳細と合衆国への示唆を中心に。
- 2 合衆国における大学拡張の起源と発展史および大学拡張の組織、形態、方法、成果。
- 3 合衆国教育における大学拡張の位置と役割。他の教育機関や運動との関係。
- 4 地方センター——その組織化と運営方法、地方委員会の組織化、地方委員会、地方センターと母組織との関係。
- 5 大学拡張講師——講義コースの編成、拡張講師の任務と特典、報酬、地方センターとの関係、学生協会との関係、受講生との関係。
- 6 大学拡張講義——とくに大学における講義あるいはライシャムとの比較からみた拡張講義の機能と特質。
- 7 講義要目——その目的、サイズ、スタイル、講義との関連。
- 8 クラス——その機能、実施方法、講義との関連。
- 9 学生協会——その目的、組織および形態、定例会の回数。

ここに示されるようにセミナーはジェイムズの考え方を強く反映し、ここでは教育問題一般への広い知見を養うこと、それをふまえた上で大学拡張の理論と実践技術を習得することが企画されている。そのうち後者については、大学拡張に関する12の小論文の提出と、少なくとも6講義からなる講義コースを自ら準備しそれを提供する実地訓練が受講生に課された。<sup>10</sup> また、特定の教科での専門性を高める措置としては、フィラデルフィア市内もしくは近郊の大学で大学院教育を受講する機会を彼らに保障した。とくにペンシルベニア大学との間では、セミナーでの学習を同大学大学院における1年間分の履習単位に換算するなど、異例の便宜がはかられていた。<sup>11</sup>

さて記録によれば、セミナーには10人が入学している。これら10人について保有

した学位もしくは経歴を併記すると、以下のような一覧表が作成できる。<sup>24</sup>

表1 大学拡張セミナー入学者一覧

1	Harriet S. Atwater	: 編集者, 旅行家
2	Martin G. Brumbaugh	: ペンシルベニア州ハンティンダン郡の元郡教育長 B.E., M.E., B.S., M.S. (ハンティンダン師範学校)
3	Hattie S. Devine	: Ph. B (コーネル大学)
4	John W. Harsberger	: B.S. (ペンシルベニア大学) 現ペンシルベニア大学生物学講師
5	Dana C. Munro	: A.B., A.M. (ブラウン大学) 現ウィスコンシン大学ローマ中世史講師
6	Frederick W. Nicolls	: A.B. (ハーバード大学)
7	S.D. Oppenheim	: B.S. (ニューヨーク州立大学) A.B. (ハーバード大学)
8	George Edward Schlegelmilch	: B.A., LL.B. (ペンシルベニア大学)
9	Richard Ware	: LL.B. (コロンビア大学) 現コーネル大学在学, ジョーンズホプキンス大学院在学
10	William F. Watson	: A.B., A.M. (コウルビー大学)

ここから、セミナー入学者は、ハーバード大学、ウィスコンシン大学、サウスカロライナ州のコウルビー大学やファーマン大学と、地理的にも広範囲にわたり、多様な大学から参集していたことが看取されよう。10人のうち、4人は大学の講師 (instructor)、1人は長年郡教育長の職歴をもち、1人はイギリスに留学していた人物であった。セミナーが開講して1か月後、「現在ほとんどすべての者が、上級学位をめざして学んでいる」と報告されている。<sup>25</sup>さらに同報告書は、セミナー修了後の進路について、「ある者は、大学に就職し、同僚が行う拡張事業を指導するであろうし、またある者は、オーガナイザーもしくは拡張講師として活動するであろう」と予測している。しかしながらこの予測は、あまりに楽観に過ぎたように思われる。セミナー修了後、アメリカ協会の拡張講師として実際に活躍したのは、10人のうちブランボー (Martin G. Brumbaugh) ただひとりであった。史料が得られる範囲でいえば、ハーシュバーガー (John W. Harshberger) にしても、マンロー (Dana C. Munro) やワトソン (William F. Watson) にしても、セミナーの特典を生かして取得した上級学位を携え、それぞれ大学教師としてペンシルベニア大学、ウィスコンシン大学、ファーマン大学に雇用されていた。つまりセミナーはアメリカ協会の意図に反し、拡張講師養成を行おうとした所期の目的を達成することはできなかった。

### 3 拡張講師の定着

つぎに、拡張講師の問題を定着という観点から考察するとどうであろうか。これに先だってアメリカ協会の10年間の活動をみると、115人の拡張講師によって954コースが提供されている。単純計算すると、1人あたりの平均担当コース数は約8コースとなる。しかしながら実態は大きくかけはなれていた。115人の拡張講師の中には、担当したコース数がわずか1コースの43人と2コースの17人が含まれていたからである。換言すれば、全体の半数以上に当たる60人は、単発的にスタッフに加わったにすぎず、活動期間の面でも1シーズンという短さであった。その分、一部の拡張講師の負担は重くなる。

アメリカ協会会長就任におよんで、ジェイムズは、専任講師 (staff lecturers) を核に据えた講師団の編成がこの運動を成功に導く要諦であることを看破していた。結果的には予期された成果をあげるにはいたらなかったが、先述のセミナーも、まさしくそうした主旨にのっとって創始されたものであった。ともかく専任講師が当初の2人から1894年には7人に増加した事実は、時の事務局長ディバインをして、「(これは) 大学拡張にとって永続性と有用性を確約する吉兆である」といわしめている。結局、90年代にアメリカ協会の専任講師として活動した人物は14人を数える。彼らは、ほとんどが20歳代後半から30歳代前半の若者で、経歴は多様であった。

担当した講義コース数では、スレッテ (Thomas W. Srette) が65コース、ショー (W. Hudson Shaw) が60コースとこの2人が圧倒的に多く、以下サイクス (Frederick H. Sykes) の39コース、ディバイン (Edward T. Devine) とロルフ (Henry W. Rolfe) の各34コース、グリグス (Edward H. Griggs) の29コース、ベロック (Hilaire Belloc) の28コース、パウエル (Lyman F. Powell) の26コース、モウルトン (Richard G. Moulton) とロートン (William G. Lawton) の各18コース、ラベル (Cecil F. Lavell) とバード (Albert A. Bird) の各9コース、アクソン (Stockton Axson) の8コース、メイス (William H. Mace) の6コースと続く。これら担当コース数を合計すると、383コースとなる。つまりアメリカ協会にとって10年間に実施された拡張講義コース総数 954の40%に相当するものを、わずか14人の専任講師が担当した計算になる。

専任講師たちと相並らび、アメリカ協会を支えたのがイギリス講師である。1890年のモウルトン (Richard G. Moulton) を皮切りに1900年までの10年間に、アメリカ協会は、イギリスからマッキングダー (Halford J. Mackinder)、サドラー (Michael E. Sadler)、ショー (W. Hudson Shaw)、コリンズ (J.C. Collins)、ベロック (Hilaire

Belloc), ウォラス (Graham Wallas) を招聘している。7人は、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン協会のいずれかに携わった経験をもつかもしくはその時点でもなお携わっていた著名な拡張講師であった。合衆国でも彼らによる拡張講義がいかに人気を博したかを物語る事例には事欠かない<sup>(8)</sup>。この点に鑑みて、イギリス人講師を招聘した意図は、一義的にはすぐれた拡張講師の獲得にあったと理解してよかろう。だが同時に、アメリカ協会は、彼らの経歴と豊富な経験をよすがとして、大学拡張に対する人びとの注意を喚起し、この運動に正当性をも付与したいと考えていた。そこには、大学教師および大学院生の関心を高め、願わくば拡張講師として勧誘したいという意図が少なからず働いていた<sup>(9)</sup>。

7人のイギリス人講師の担当コース数をみると、3度の訪米でその間に60コースを提供したショーを筆頭に、1896年から1898年までアメリカ協会と関係したベロックが28コース、1890年から3年間活躍したモウルトンが18コースを担当している（これら3人は、専任講師として登録されていた）。他のウォラス、サドラー、マッキングダー、コリンズの4人が担当したコース数は、それぞれ7コース、5コース、4コース、3コースであった。

ところで拡張講義コースを行うにあたっては、より広い地域に効率よくサービスする目的から、6ないし12都市をユニットとするサーキットを組織し、講師は、それらの都市を順次訪れて講義を提供する巡回講義システムが採られた。これをロビンソン (W. Robinson) の場合でみると、次のようである。「English Poets of the Revolution Age (1776—1848)」と題する6講義コースは、ペンシルベニア州ヨークを起点として、1892年1月11日の月曜日に開始されている。当夜ヨークでは、地方委員会 (local committee) が200人の聴衆を集めて、フィラデルフィアから来演するロビンソンを待っていた。講義は午後8時から行われ、引き続いて9時からは1時間の予定で質疑応答がかわされた。その夜当地に投宿した彼は、翌朝汽車で29マイル離れたハリスバーグに向かう。市長をはじめ婦人、教師、実業家など多様な人びとからなる400人の聴衆に講義をした後、ホテルでは受講生が提出した課題論文を添削しなくてはならなかった。一夜明けた水曜日の午後には、26マイルの旅をして、彼はレバノンに到着する。裁判所の1室を借りて行われた講義には、200人の市民が出席していた。翌木曜日にランカスターで講義の後のクラスでは、フランクリン・マーシャル大学の教師たちが参加したことも手伝って、活発な質疑応答が展開された、と報告されている。その後、金曜日に250人の受講生が待つコロンビアと土曜日にはゲティスバーグでの講義を終えて、はじめてサーキットを一巡したことになる。そして翌週の月曜日には、ヨークから再びこの日課が始まる。彼は、これを6回くりかえさなくてはならなかった。

このように巡回講義では、汽車による長旅やホテル住まい、苛酷な労働は避けがたい。巡回講義に伴う困難と苦勞は、サーキットを構成する都市の数が増すにつれ増殖する。そこでロビンソンは、週のうち2日休暇をとりながら5日巡回講義を担当するのが妥当と考えた<sup>63</sup>。にもかかわらず意に反して彼は、1892年9月23日からは“12都市サーキット”(Twelve-Town Circuit)を担当せねばならなかった。これは、ペンシルベニア州北西部の都市カンパニアを振り出しに、ラトロープ、インディアナ、ゲティスバーグ、ユニオンタウン、パトラー、エリー、フランクリン、グロウプシティ、ウォーレン、タイタスビルを経てニューカッスルまでの行程で、一巡するだけで日曜日を除き12日を要した。しかも彼は、このサーキットを年末に一応終えるや、新年早々から4月2日まで2回目を、またその翌日からはすぐに3回目の“12都市サーキット”で「英国詩」と「シェイクスピア」を講じている。その結果、1893年度1年間にロビンソンが提供した講義総数は240、実労日数は41週、そして旅程は2万マイルにも達した<sup>64</sup>。

ところで、サーキットが始まって間もない10月5日の早朝、「立ちどまっちゃいかん」「次のセンターに出かけるために荷造りをしろ」と警告を聞いた際に「もはや休息する場所はないと感じ始めていた」と、ロビンソンは自らの心情を吐露している<sup>65</sup>。生活の急変による精神の動揺、インフルエンザ、その他演説家に特有の病気にもめげず、拡張講師は、ひたすら町から町へ移動しながら講義を行わねばならなかった。それが心身両面での耐えがたい苦痛を伴ったことは、想像に難くない。

その意味からすると、拡張講義を担当する大学教師の中から毎年何人かの神経衰弱患者がでていた<sup>66</sup>、との指摘もあながち誇張ではない。また1891年1月21日ウィリアムズポートからの帰途、列車事故に遭遇して18か月間休養を余儀なくされたロルフのように、時として巡回講義は危険でさえあった<sup>67</sup>。

たしかにアメリカ協会は、「十分な資質を備えかつこの運動に自らを投じうる講師には、年間1,500~3,000ドルの収入が約束される」と公言している。当時、一般の大学教授の平均的な奉給が1,470ドル、学長のそれが3,047ドルであったことを考えあわせるなら、その額は決して低くはない。ただし実際には、担当する教科の性格と拡張講師の側での学識はもとより、指導能力によって、その額は著しく左右された。したがって恵まれた収入を得ることができたのは、文学、歴史、社会科学など人気のある教科について、学問的のみならず、あくまで“楽しく”講義を提供した少数の者にかざられる。ちなみに先のロビンソンが1892年に実施したサーキットでは、6地方センターはそれぞれ、146.26ドルの費用を負担している。そこから旅費と宿泊費の26.26ドルを差し引くと、1講義コースにつき実収入は120ドルと算出される。したがってロビンソンは、そのサーキットから720ドルの報酬を得たことになる。

かつてジェイムズは、生涯にわたる自己教育の必要性から大学拡張の究極的な目的を論じ、自己教育の教義を万人に説くところに拡張講師の使命を見出した。これを拠り所にして「大学拡張運動においては、教育家 (educationalist) は博愛家 (philanthropist) となり、博愛家は教育家となる<sup>(41)</sup>」と彼は断じている。しかし、多くの拡張講師にとっては、巡回講義に払わねばならなかった心身両面での犠牲は、経済的な報酬の代価としてはいうまでもなく、たとえ彼らのボランティアズムに訴えたにせよ、あまりに大きすぎたように思われる。

ためにイギリス人講師はもとより、専任講師の場合にしても活動期間は概して短い<sup>(42)</sup>。結局彼らは他に有利な職があれば、それを求めて容易に移動した。そもそも初代会長ペーパーは、アメリカ協会がひとまず軌道にのったとみるや、ペンシルベニア大学総長としての職責遂行を理由に会長の役職を辞している。この時初代事務局長をつとめ、訪英してイギリス大学拡張に関する報告書を作成するなど後の大学拡張運動に貢献するところ大であったヘンダーソンは、1892年に新設をみたシカゴ大学の大学拡張部長に抜擢された。その後1895年には、ヘンダーソンの後任として第2代会長ジェイムズがシカゴ大学に移動している。他にも同大学には、英文学教授として着任したモウルトンもいる。またパウエルはペンシルベニア大学に、そしてディバインは、1896年に学校長となってアイオワ州に赴任していった。

#### 4 アメリカ大学拡張協会の限界

「国内のいかなるものも、当協会ほどに多くの拡張事業を実施してはいないし、またこれほどに成功してはいない<sup>(43)</sup>」と明言したアメリカ協会ではあったが、ついで拡張講師に関しては有効な方途を見出すことはできなかった。そのためアメリカ協会は、1900年の時点でもなお拡張講師の恒常的不足に悩まされていた<sup>(44)</sup>。

こうした事態を招来せしめた原因が、直接的には拡張講師たる人材の不足と一旦獲得した人材の高い移動率にあったことは、論をまたない。だが今少し立ち入って考察すると、90年代大学拡張をめぐるいくつかの重要な問題が明らかになってくる。

そのひとつは、拡張教育の方法に関係している。すでに述べたように当時の大学拡張では、拡張講師が、サーキットに組織された6～12都市を巡回しながら講義コースを提供する方法が一般的であった。そもそもこの方法は、イギリスにおいて案出されたものである。それだけに、都市間の距離が比較的短く、鉄道網が完備した地域に適していた。これを合衆国にそのまま導入するには無理があった。この点を、ロレンス (A.T.J. Lawrence) の論文<sup>(45)</sup>でみてみよう。

大学拡張のシーズンは1年のうちでも寒い方の半年に属し、この期間に活動のほ

とんどもが行われる。合衆国の北半分の冬は、イギリスよりも寒い。さらに距離は長く、汽車の便は悪い。駅には、待ち合い室や食堂はない。主要幹線の連廊つき客車は、一般のイギリス人旅行者には未知の快適さと豪華さを与えるが、拡張講師の旅行は、大半が支線の普通列車で行われる。合衆国では拡張講師は、イギリスの場合の5倍の行程を旅し、食事は、しばしば薄汚れたランチカウンターでとるか、さもなくば何も食べないかである。たったひとつの講義を行うために、列車で18~20時間過ごすこともままある。もしも寝台車で一夜を過ごせたなら、運がよかったと考える。その後、冬の朝7時に駅に降ろされ、零下10度の身を切るような寒風の中で、疲れた旅を終えるまで食事をする機会もない。

これに続けて、ロレンスは、「もしも拡張講師の側での身体的な緊張が緩和されな  
いなら、有能な人びとがこの活動に留まることに同意するかどうかは疑わしい<sup>(6)</sup>」と論断した。こうした英米両国の自然的、社会的条件の差を考慮することなく、90年代半ばまでアメリカ協会の事業規模は拡大の一途を辿った。そのために拡張講師は、並々ならぬ苦勞と耐えがたい苦痛を強いられた。したがって拡張講師の定着を妨げた一因は、巡回講義の方法に求められてしかるべきであろう。

なお付言すると、その後アメリカ協会は、拡張事業の実施地域を漸次フィラデルフィア周辺地域に縮小している。だが所詮それは、巡回講義システムに内在する限界を克服するものではなかった。その点でシカゴ大学が通信教育による大学拡張に先鞭をつけたことは積極的に評価されるであろう。

第二点として、拡張講師たちが大学拡張をいかに捉えていたか、つまり彼らの大学拡張観が問題となる。ラスル (James E. Russell) は、大学拡張運動の著しい特徴に拡張講師たちの「誠実さ」を挙げ、「拡張講師といえすぐに名前が思い浮ぶような人は、伝道生活 (missionary life) に入るために、有利で安定した職をあきらめてきた」と述べている<sup>(7)</sup>。おそらく彼の脳裏に浮かんだのは、ショーをはじめ輝かしい未来を約束されたにもかかわらず、学生生活を断念したディバインや大学教師の役職を辞して大学拡張に身を投じたロルフなどであったにちがいない。だが、そうした人物は全体から見るとほんの一握りの拡張講師たちにすぎなかった。

ここで想起すべきは、19世紀末における大学の動向である。毎年大学が新設される一方で、ハーバード、コロンビア、コーネル、プリンストン、イエール、ミシガン、ペンシルベニアといった伝統的な大学は、規模の拡大を図った<sup>(8)</sup>。結果的に1870年から1900年までの30年間に大学数は倍増し、教師数は、5,553人から23,868人と4.3倍に増加した。当然のことながら、大学教師の需要は供給を凌駕する。西部の諸大学の学長たちは、毎年東部にやってきて、バルチモアやドイツで博士学位を取得したばかりの大学院生を求めた、といわれる。こうした情勢下であったればこそ、大学院の学

生たちに向けて、大学拡張を将来性に富む就職口と宣伝した時にも、ジェイムズは、拡張講師となることからたらされる利点にあえて「大学教師として大学に就職する可能性」を掲げねばならなかった<sup>60</sup>。

拡張講師としての成功が、その人物を有名にする。彼の活動は注目される。教育長を所望する教育委員、有望な教授を捜している学長、学長の適任者を全国に求めている大学評議員たち、彼らは、やがて優れた拡張講師のことを聞きつけるだろう。こうしたことは、イギリスでは周知の事実となっているので、ひとたび成功した人物が長いこと大学拡張に留まるのを期待する者はいない。これは、わが国にもあてはまる。大学に職を見つける最短の道は、大学拡張を担当することでもって開かれる、と。

実際、大半の若者にとって、拡張講師の職は、まさに“有利で安定した職”にありつくまでの暫定的な生業を意味した。これは、セミナーに入学した若者たちが大学院教育に専念し、セミナーを修了すると、大学に職を求めてフィラデルフィアを去っていった事実によって例証されるであろう。またそうした大学拡張観は、拡張講師の定着になんら寄与しなかったばかりか、巡回講義に伴う辛苦と相まって、彼らにいとまやすく転職を決意させる誘因ともなった。

最後に、最も重要な問題として、大学拡張に対する大学側の反応に論及しておかねばならない。90年代初頭、諸大学が大学拡張に強い懐疑の念を抱いたことは、すでに述べたとおりである。ミネソタ州立大学を例にとると、ジャドソンの報告から、大学当局の当惑<sup>61</sup>が窺われる。

ごく最近まで、ミネソタ州立大学は、大学拡張と公式に関係するのを差し控えてきた。特別な補助金もなく、経費は大学が負担しなければならないため、評議員たちは、本学が大学拡張に関与することを正当とみなさなかった。そこで、大学拡張に対する要求が現実存在することが明らかになるまで、静観するのが望ましいように思われた。

このように大学当局は、多くの場合、大学拡張にかかわることに消極的であった。しかも大学拡張に関心を示した大学関係者ですら、「大学拡張運動にとって、任意の団体を組織するのが最善の方策<sup>62</sup>」と考えていた。この点では、ペパーも例外ではない。もしも1889年の時点で、彼が総長の職権を行使していたなら、ペンシルベニア大学が大学拡張を主催した可能性も少なからずあった、と推察されるからである。しかし彼が構想したのは、あくまで任意団体の結成であった。別言すると彼にしても、大学拡張を大学の本義的な機能と捕捉するまでにはいたらなかった。大学拡張に対するこうした認識は、同大学のアメリカ協会への関与のしかたにも反映される。

同じ任意団体であっても、イギリスのロンドン協会はアメリカ協会と著しい対比を

みせている。すなわちロンドン協会では、当初からロンドン大学、キングズカレッジなど近隣の主要な大学が運営協議会 (council) に名を連ね、当協会の運営に参画している。さらにロンドン協会の拡張教育は、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学の代表者各3名ずつからなる大学合同委員会 (Universities Joint Board) の厳正な管理下におかれた。委員会は、<sup>63</sup> 拡張講師と試験官の任命および教育全般にわたる監督にあたった。そこには、教育水準の維持とひきかえに拡張講師を供給しようとする大学側の方針が貫徹されている。これは、拡張講師の幅広い選択を可能にしたばかりか、協会が行う拡張教育に大学教育としての格づけを付与するものであった。

それにひきかえアメリカ協会の場合には、大学が組織的にかかわった事実はみとめられない。ために、拡張講師の獲得は困難をきわめた。事態への対応策としては、大学院を卒業したばかりの若者に依存するほかはなかった。しかしながら、これは反面で、拡張すべき大学をもたぬ“擬似大学拡張”との痛烈な大学拡張批判を生起せしめた。他方、イギリスの先例に即していうと、アメリカ協会は、拡張教育の質を維持するための歯止めをもたなかった。その結果、まず拡張講義コースのユニットを構成した6要素のうち、課題論文と最終試験が廃止され、1講義コースの講義数も6講義に短縮をみている。そして大学拡張の基本的性格も、初期の「大学教育の拡張」からやがて通俗講演に通じるものへと変質していった。<sup>64</sup>

あらためていうまでもなく、拡張協会とは、大衆に高等教育をもたらす上で、大衆と大学を結ぶ媒体として機能すべきものである。したがってこの運営形態をとるかぎり、大学との緊密かつ組織的な関係がなによりも要請される。にもかかわらずこれを欠いていたところに、アメリカ協会の限界があった。その意味で大学拡張が合衆国の地に根づくには、世紀転換を待たねばならなかった。

#### 〔注〕

- (1) "The History of a Branch Society," James, George F. ed., Handbook of University Extension. 1893. pp. 18—19.
- (2) The American Society for the Extension of University Teaching, Ten Years' Report of the American Society for the Extension of University Teaching, 1890—1900. 1901.
- (3) Moulton, Richard G., "Talks with Lecturers." The University Extension World, Vol. 1, no. 4, April, 1893.  
James, Edmund J., "The University Extension Lecturer." Handbook of University Extension. 1893.

- James, Edmund J., "Some General Considerations on University Extension." *University Extension*, Vol. 2, no. 10. April, 1893.
- (4) Degarmo, Charles, "The Colleges and University Extension." *Proceedings of the First Annual Meeting of the National Conference on University Extension*, held in Philadelphia, December 29—31, 1891. 1892. p. 53.
- (5) Palmer, George H., "Doubt about University Extension." *The Atlantic Monthly*, no. 70. March, 1892. pp. 372—73.
- (6) Gardner, John, "The Outlook in Colorado." *University Extension*, Vol. 3, no. 5. November, 1893. p. 153.
- (7) *Ibid.*
- (8) Devine, Edward T., "The Influence of University Extension upon the Universities." *Handbook of University Extension*. 1893. pp. 74—81.
- (9) Ogden, Howard N., "Extension Teaching and the State Universities." *The University Extension World*, vol. 4, no. 2. October, 1894. p. 81.
- (10) *The American Society for the Extension of University Teaching*, *op. cit.*, pp. 16—21.
- (11) James, Edmund J., "The University Extension Lecturer." *Handbook of University Extension*, 1893. pp. 209—12.
- (12) Powell, Lyman P., "Ten Years of University Extension." *Atlantic Monthly*, Vol. 88. September, 1901. p. 395.
- (13) Charles Brinley to Herbert Baxter Adams, January 8, 1898.
- (14) "The Lecturer and His work." *University Extension*, Vol. 4, no. 4. October, 1894. p. 123.
- (15) "The University Extension Seminary." *Handbook of University Extension*, 1893. p. 356.
- (16) *Ibid.*, p. 357.
- (17) "The University Extension Seminary." *University Extension*, Vol. 2, no. 5. November, 1892. p. 135.
- (18) "The University Extension Seminary." *Handbook of University Extension*, 1893. p. 358.
- (19) James, Edmund J., "New Career for College Men." *The Review of Reviews*, Vol. 7. February-June, 1893.
- (20) 外部から招聘された講師には、次のような人物がいた。  
Hon W.H. Harris (U.S. Commissioner of Education): Dr. James MacAlister

- (President of the Drexel Institute): Dr. Charles Degarmo (President of Swarthmore College): Dr. Isaac Sharpless (President of Harvard College): Prof. Simon N. Patten (Univ. of Pennsylvania): Principal George M. Philips (State Normal School): Rev. A. E. Winship (Editor of "New England Journal of Education"): Rev. Hudson Shaw (Oxford University)
- ① "The University Extension Seminary for the Study of American Educational Problems and the Training of University Extension Lecturer and Organizers." *University Extension*, Vol. 1, no. 12. June, 1892. pp. 401~4.
- ② *Ibid.*, p. 403.
- ③ *Ibid.*
- ④ "Notes: The University Extension Seminary." *University Extension*, Vol. 2, no. 5. November, 1892. pp. 157~8.
- ⑤ "The University Extension Seminary." *University Extension*, Vol. 2, no. 5. November, 1892. p. 136.
- ⑥ *Ibid.*
- ⑦ *Ibid.*
- ⑧ Devine, Edward T. "What Has the American Society Accomplished?" *University Extension*, Vol. 4, no. 3. September, 1894. p. 72.
- ⑨ たとえばパウエルは、ジョンズ・ホプキンス大学卒業後、一度ウィスコンシン大学で大学院に在籍しつつ拡張事業に携わったが、うまくいかなくて、その後アメリカ協会の専任講師となった。スレッテはハーバード大学卒業後1894年に、またサイクスはジョンズ・ホプキンス大学卒業後、1897年に専任講師陣に加わっている。なお、ブランボーはセミナー修了後、アメリカ協会に関係したが、専任講師リストに記載されていないばかりか、実際に講義コースを担当したことも記されていない。
- ⑩ James, Edmund J., "Review of the Work of the American Society for the Extension of University Teaching, 1891—1894." 1895. *Citizen*, Vol. 1. April, 1895. p. 46. *Citizen*, Vol. 4. August, 1898. p. 125.
- ⑪ Powell Lyman P., *op. cit.*, pp. 399—400.
- ⑫ Robinson, William C., "The Circuit." *University Extension*, Vol. 1, no. 11. May, 1892. pp. 344—50.
- ⑬ *Ibid.*
- ⑭ Robinson, William C., "A Year's Work in the Extension Field." *Univer-*

- sity Extension, Vol. 4, no. 1, July, 1894. pp. 6—18.
- 35 Ibid., p. 16.
- 36 Thorpe, Francis N., "The Lecturer and the Center." *The University Extension world*, Vol. 1, no. 3, March, 1893. p. 50.
- 37 Powell, Lyman P., *op. cit.*, p. 398.
- 38 "Notes." *University Extension*, Vol. 2, no. 8. February, 1893. p. 249.
- 39 "Salaries of University Extension Lecturers." *Handbook of University Extension*. 1893. p. 398.
- 40 Harper, William R., "The Pay of American College Professors." *Forum*, Vol. 16. 1893. p. 7.
- 41 James, Edmund J., "A New Career for College Men." *The Review of Reviews*, Vol. 7. February-June, 1893. p. 580.
- 42 専任講師の活動期間は次のようである。  
 Richard G. Moulton (1890—1 : 91—2 : 92—3), Edward T. Devine (1891—2 : 92—3 : 93—4 : 94—5 : 95—6), Henry W. Rolfe (1891—2 : 92—3 : 94—5 : 95—6), Lyman P. Powell (1892—3 : 93—4 : 94—5), W. Hudson Shaw (1892—3 : 94—5 : 95—6 : 98—9), William C. Lawton (1893—4 : 94—5), Stockton Axson (1894—5 : 95—6), Albert A. Bird (1894—5 : 95—6), Thomas W. Surette (1894—5 : 95—6 : 96—7 : 97—8 : 98—9 : 99—00), Hilaire Belloc (1896—7 : 97—8), Frederick H. Sykes (1897—8 : 98—9 : 99—00), William H. Mace (1898 : 9), Edward Howard Griggs (1899—00), Cecil F. Lavell (1899—00).
- 43 "Report of the Board of Directors." *Citizen*, Vol. 2. December, 1896. pp. 347~8.
- 44 *The American Society for the Extension of University Teaching*, *op. cit.*, 1901. p. 8.
- 45 Lawrence, A.T.J., "Comparison and a Criticism." *The University Extension World*, Vol. 2, no. 1. July, 1893. p. 4.
- 46 Ibid.
- 47 Russell, James E., *The Extension of University Teaching in England and America*. 1895. p. 198.
- 48 Palmer, George H., *op. cit.*, p. 372.
- 49 Powell, Lyman P., *op. cit.*, p. 395.
- 50 James, Edmund J., *op. cit.*, p. 580.

- 61) Judson, H.P., "Report on University Extension in Minnesota." Proceedings of the First Annual Meeting of the National Conference on University Extension, held in Philadelphia, December 29—31, 1891. 1892. p. 203.
- 62) Ogden, H.N., "Report on University Extension in West Virginia." Proceedings of the First Annual Meeting of the National Conference on University Extension. 1892. p. 171.
- 63) Henderson, George, "Report upon the University Extension Movement in England." 1890. p. 7.
- 64) 拙稿, 「十九世紀大学拡張論の一考察」今治明德短期大学編『今治明德短期大学研究紀要』第13号, 1981.